小長井町文化財調査報告書　第１集

長戸鬼塚古墳

（ながとおにづか）

── 修復整備に伴う発掘調査 ──

１９９８

長崎県小長井町教育委員会

小長井町文化財調査報告書　第１集

長戸鬼塚古墳

ながとおにづか

―― 修復整備に伴う発掘調査 ――

1998

長崎県小長井町教育委員会

発刊にあたって

このたび平成９年度の県費補助を受けて実施しました小長井町小川原浦名にあります長戸鬼塚古墳の発掘調査報告書を刊行することになりました。

長戸鬼塚古墳は，小長井町の南東，有明海に突き出た台地の先端部に立地する円墳であります。典型的な複室構造の横穴式石室で，玄室や前室の腰石には線刻画が描かれていることで知られ，県の史跡に指定されています。

今回の調査は古墳の修復整備に先立つものでありましたが，墳丘の詳細な実測とともに，石室内の精査を行いました。その結果，古墳の築造時期が６世紀末まで遡ることがわかりました。今後は今回の調査で得た成果をもとに長戸鬼塚古墳の修復を進めていく所存であります。

現地指導をいただき有益な助言を頂戴した小田富士雄先生をはじめ，調査を担当された長崎県文化課の方々の御協力に感謝申し上げます。

本書を小長井町の文化財の保存・顕彰および地域の学習資料として活用いただければ望外の喜びとするところです。

平成10年３月31日

小長井町教育委員会

教育長　　土　井　勝　義

例　　言

1．本書は北高来郡小長井町小川原浦名に所在する長戸鬼塚古墳（ながとおにづかこふん）の修復整備に伴う発掘調査の報告書である。

2．調査は小長井町教育委員会が調査主体となり，長崎県教育庁文化課が担当した。

3．調査期間は平成９年11月10日から11月21日までの11日間実施した。

4．福岡大学人文学部教授小田富士雄氏（長崎県文化財審議委員）には現地指導をいただいた。

5．遺物の実測にあたっては，古門雅高・森崎京子・網谷泰代の協力を得た。遺構・遺物の製図は，渡辺洋子・斉藤いづみと川道寛がおこなった。

6．本書の写真は，川道が撮影した。

7．調査関係者

小長井町教育委員会	教育長	土井　勝義
	教育次長	久田　敏幸
	生涯教育係長	中村　春幸
長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	川道　寛
	文化財保護主事	甲斐田　彰

8．本書は分担執筆した。

「第２章　遺跡の地理的歴史的環境」を甲斐田が執筆した他は川道が執筆した。遺物の観察は古門雅高の手をわずらわせた。

9．本書の編集は川道が行った。

10．調査および本書の作成にあたって次の方々より御協力と御教示をうけた。記して謝意を表する。

小田富士雄（福岡大学人文学部教授），下川達彌（長崎県立美術博物館次長），本馬貞夫（長崎県立図書館指導主事），高野晋司（長崎県文化課課長補佐），藤田和裕（長崎県文化課埋蔵文化財班係長），立平進（水産大学校助教授），宮崎貴夫（原の辻調査事務所係長），徳富則久（佐賀県文化財課企画調整主査），小松譲（佐賀県文化財課指導主事），渡部俊哉（白石町教育委員会主任主事）

本 文 目 次

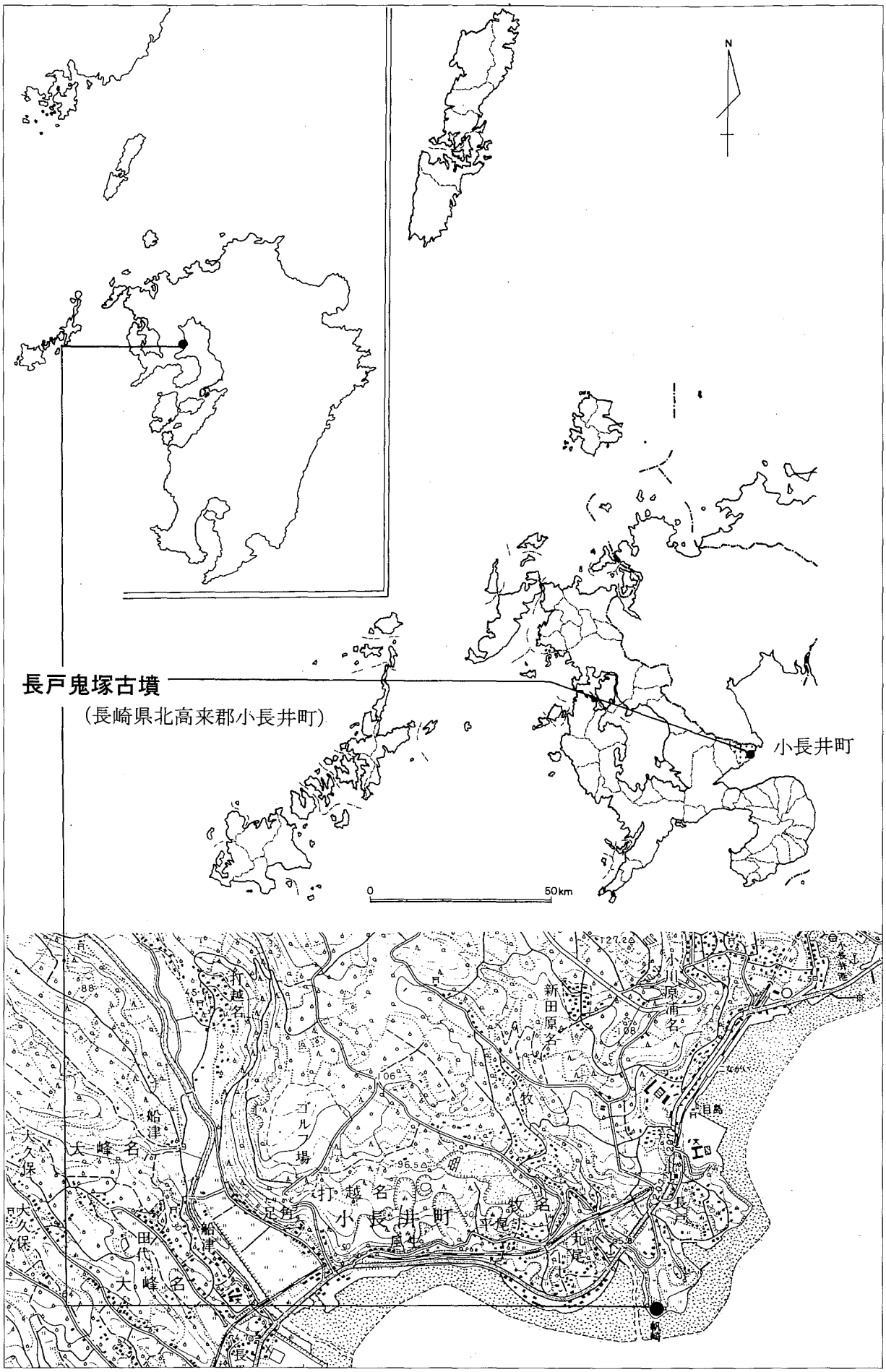
第１章　調査にいたる経過
　１．長戸鬼塚古墳の名称の来歴……2
　２．調査の経過……2
第２章　遺跡の地理的歴史的環境……3
第３章　調　　査
　１．墳　　丘……4
　２．主 体 部……4
　３．出土遺物……7
第４章　総　　括
　１．有明海西岸の古墳について……9
　２．線刻画について……9
第５章　ま と め……10

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　有明海西岸の古墳分布図……3
第３図　墳丘実測図（Ｓ＝1/200）……5
第４図　石室実測図（Ｓ＝1/80）……6
第５図　須恵器実測図（Ｓ＝1/2）……8
第６図　土師器実測図（Ｓ＝1/2）……8
第７図　線刻画実測図……9
第８図　前室腰石部の線刻画実測図……10

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景・測量調査・羨道部・框石・玄室の撹乱……14
図版２　古墳近景・羨道部・羨道部東側壁……15
図版３　玄室奥壁・前室線刻画……16
図版４　玄室天井部……17
図版５　出土遺物……18


N
長戸鬼塚古墳
（長崎県北高来郡小長井町）
小長井町
0
50km
打越名
新田原名
小川原浦名
牧
ゴルフ場
船津
大峰名
大久保
足角
打越名
小長井町
牧名
平尾
風土
丸尾
田代
大峰名
大久保
長

第１図　遺跡位置図

第１章　調査にいたる経過

１．長戸鬼塚古墳の名称の来歴

本古墳が初めて文献に登場するのは，津田繁二が『長崎談叢』誌上に発表した遺跡地名表である（津田1940）。北高来郡の項に「横穴式古墳、巨石にて築造　小長井村大字小川原浦帆崎名」と記載されたのがそれである。昭和37年の『長崎県遺跡地名表』には「小長井村小川原浦名・長戸鬼塚1061帆崎，円墳，横穴式石室，長崎談叢26」とあり，つづいて「　〃　約10基，箱式石棺，鉄刀(註1)」と記載されている。津田および『長崎県地名表』では遺跡名は記載されていない。

その後昭和51年文化庁刊行の『全国遺跡地図42　長崎県』では，長戸鬼塚古墳は帆崎古墳と帆崎古墳群と表記されている。地図上では誤った位置に表記されている。昭和62年発行の長崎県教育委員会による『長崎県遺跡地図』は，すべての市町村をくまなく踏査し，遺跡台帳を作成したのちに発行したものであるが，これによると長戸古墳と帆崎古墳群が隣接して存在することになっている。ところが遺跡台帳では長戸古墳は「石室が完全に残る」と記されているものの，帆崎古墳群は「現地踏査するも確認できず」とある。このことは平成６年発行の新遺跡地図でも改訂されずに踏襲される。本古墳は名称が，帆崎古墳・長戸古墳・長戸鬼塚・長戸鬼塚古墳と４つもあり，研究者の間で混乱を来してきたが，昭和63年には県の史跡に長戸鬼塚古墳の名で指定されており，長戸鬼塚古墳の名称が市民権を獲得していることから今後はこの呼称で統一したい。

長戸鬼塚古墳は石室が開口しており，墳丘も残っていることからその存在は早くから知られており，内部は徹底的に盗掘されている。伝聞ではあるが盗掘によって鏡が出土したらしいが詳細は不明であるとのことであった。本墳の特徴の一つである線刻画は津田の地名表には記載されていないものの，古老の話によると線刻があることは古くからわかっていたらしい。昭和45年，長崎県文化財課（現文化課）が実施した分布調査によって線刻画と確認されたことから，昭和47年に長戸鬼塚古墳と丸尾古墳の石室の実測調査が行われた（田川1982）。昭和63年には，保存状態の良さや珍しい線刻壁画をもつ稀少性を評価され県の史跡に指定された。

２．調査の経過

今回の調査は，羨道部入り口東側の天井石直下の側壁が崩壊の危機にあることから，整備復元の資料を得るために県費の補助を受けて実施した。調査の主眼は，詳細な墳丘の平面図を作成することおよび石室の床面の確認と羨道部の掘り下げを主眼とした。

墳丘および周辺の地形図は100分の１の平板実測とし，25cm間隔で等高線を入れた。石室は中心線にそって西側に40cm幅のサブトレンチを設定して床面の確認を行った。発電機を使って２灯のライトで調査したものの，照明が暗く調査は難渋したが，ようやく羨門部に框石を検出したことで床面の確認ができた。ついで羨道部の土砂を除去したのち羨道部床面を精査した。周溝の有無を確認するために開口部に調査区を設定した。

註１　戦前に避病院建設の際，箱式石棺が発見され人骨や鉄刀などが出土したらしい。これを帆崎古墳群と呼称したものであるらしいが消滅しており遺跡の詳細は不明である。

第２章　遺跡の地理的歴史的環境

小長井町の地勢は北西部が高く数条の山地を形成し，緩やかに南東部に傾き海岸部に至る。町北西部は中起伏火山地となる。この地域は多良火山の本体をなす安山岩質火山岩類を形成した２度の火山活動のうち古い方の活動である，第四紀更新世初期～中期の豊肥火山活動の噴出物からなる。町最高峰の三番多良岳(649.5m)や山茶花高原(470m)があり，基本的に人工の針葉樹林地帯となっているが，天然の広葉樹林や小規模な畑・果樹園もみられる。町中央部は溶岩台地である。多良火山の基底部をなす玄武岩からなり，前記の活動以前の新第三紀鮮新世～第四紀更新世初期の噴火により形成されたと推定されている。この付近は北西部よりも傾斜が緩やかであるため針葉樹林より果樹園や畑地として利用されている土地が多い。山麓を源流とする河川は急峻で短いが，河川沿いには谷底低地が発達し，長里川や築切川の下流域の沖積低地や干拓地とともに水田地帯となっている。南東部には若干の海岸低地があり鉄道と国道が並行して走り，沿線沿いに集落が形成されている。海岸線は人工海岸でない部分はすべて泥砂礫浜海岸となる。海岸部は干満の差が激しく，200～300mの干潟ができる。

長戸鬼塚古墳は小長井町の南東，有明海に南に突き出た溶岩台地の岬である帆崎の先端部に立地する。古墳の周辺は西側は小深井川河口の湾，南側は有明海が間近に迫っており，東側は浅い谷筋で水田、北側は畑地となっている。海岸からの距離は約30m、墳頂の標高は約19m を測る。また古墳の西側は小規模な荒地となっており，大正年間の開墾の際箱式石棺が７～10基発見され，人骨や鉄剣等が出土したということであるが、現在遺物の所在等は不明である。

諫早湾北岸から佐賀県藤津郡太良町にかけての多良山系の末端部である海岸丘陵の先端部には後期古墳が立地することが多い。

北から太良町伊福古墳群・長崎鼻古墳群・宝前鼻古墳群・野崎古墳群が，長崎県に入ると小長井町竹ノ崎古墳・城山古墳・大峰古墳・長戸鬼塚古墳・丸尾古墳・善神さん古墳などである。それらの古墳は有明海や諫早湾に突き出た標高10～20mほどの丘陵先端に占拠しており，いずれも海岸を睥睨する地を選択する傾向にある。古墳の周辺は経済的背景となる沖積平野に乏しいところから，これらの古墳の被葬者としては有明海を舞台に活躍した海人を想定することも可能であろう。また太良町内の古墳が群集する傾向にあるのに対し，長崎県側では単独で存在する場合が多いことも相違点の一つである。

第２図　有明海西岸の古墳分布図

第3章　調　　査

1．墳　　丘（第3図）

古墳は有明海に突き出た丘陵の先端に位置し，墳丘頂の標高19.25m，また海岸からの距離は約30mを測る。羨道部側を除く3方向は，東側が隣接する畑によって，北・西側は共同墓地の造成によって地形が改変されている。また盛土が相当流失しているために墳丘の形状は頂上付近が楕円形で下位にいくにしたがって隅丸方形に近くなるが，本来は径17m程度の円墳であろう。高さは4.5mほどである。南側に土手状に残る部分の西側は，避病院建設の際に掘削され箱式石棺が検出されたらしい。羨道部の前面に周溝を確認したが，幅1m程度で深さは羨道部から約1mであった。この周溝がどの程度めぐるものか不明であるが，少なくとも東側は畑によって破壊されていることは確実である。墳丘には小児の頭大の海浜礫が数多く露出しており，墳丘全面に葺石が施されていたことは確実である。

2．主 体 部（第4図）

主体部は，主軸をN-38度-Wにとり，南東に向いて開口する横穴式石室で，前室と玄室の2室をもつ複式構造で，現存する石室の全長は11.3mである。

玄室は，奥壁に幅2.5m高さ2.5mの巨大な一枚の不整形な自然石を立て，側壁は長さ2m高さ1m程度の腰石を2枚並べる。玄室の規模は床面で長さ4.3m，奥壁側の幅2.5m，袖石部の幅2.2mで若干幅が狭まる羽子板状を呈する。天井までの高さは中心で3.2mを測る。天井は3枚の天井石を重ねる構造であるが，中央部の天井部は一段高く作っている。天井部にいくに従って幅が減少していくいわゆる持ち送り構造である。奥壁の一枚石の形状を利用して持ち送りする形で行われており，奥壁西側は石のラインを利用して，東側は西側と傾斜をあわせるために大小の石を補塡している。天井石までには奥壁の一枚石では高さが足りず50㌢ほどの大石を2個重ねて高さを補っている。東奥壁のコーナーはまわし石（力石）をおいて隅を丸くなるようにするなど古い技法をとる一方，腰石上部の塊石の積み方は新しい技法である重箱積みを併用するなど，過渡的な姿を如実に示している。

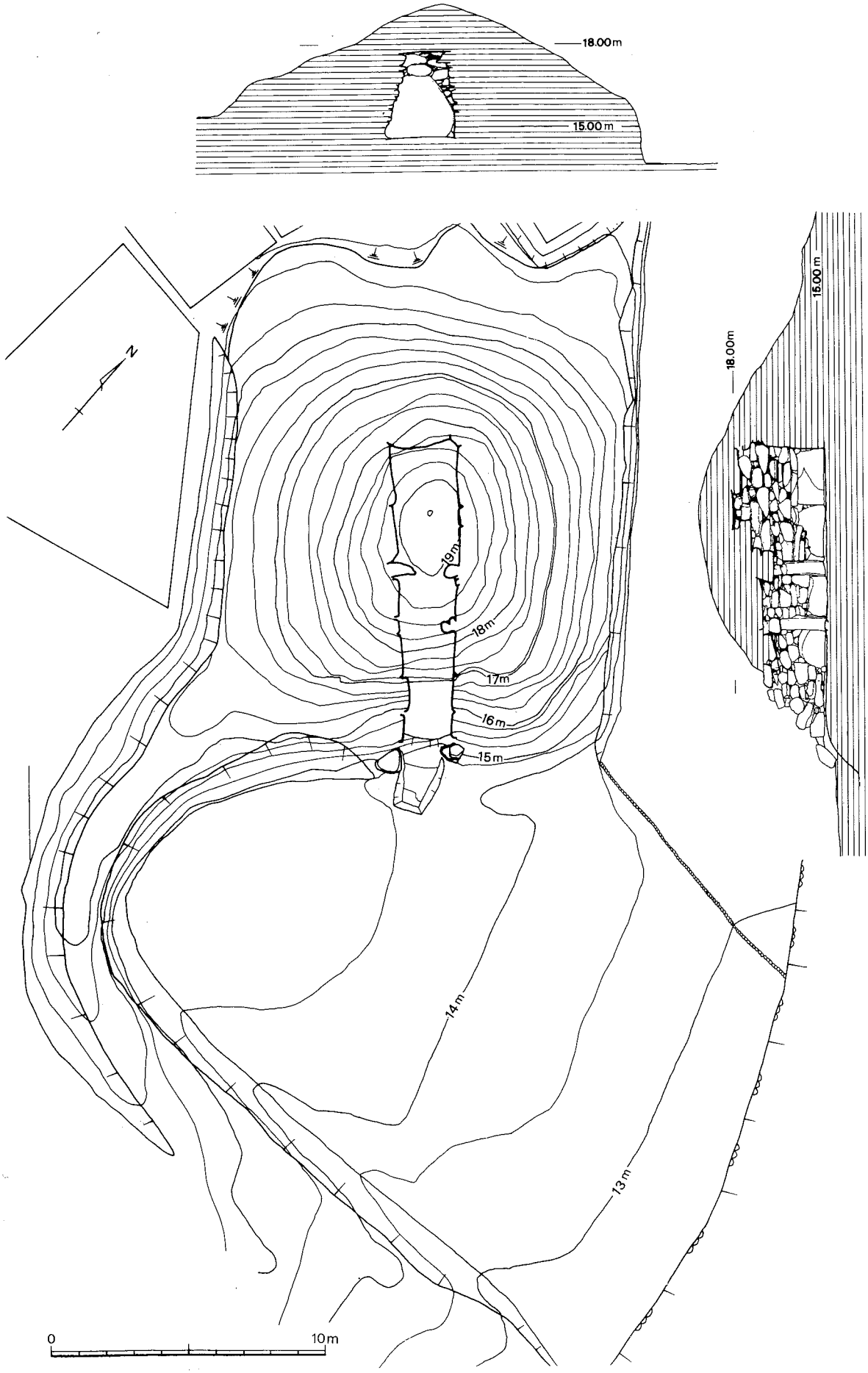
東側壁奥壁側の腰石には右肩部に細かい鋸歯状の線刻が斜めに数十cm程度刻まれている。そのほかにも線刻はみられるが，後世の落書き（人名など）もあり識別は容易ではない。

玄門は，厚さ40～50cm程度の分厚い袖石が腰石と腰石の間に立てられており，その上に2枚の楯石が掛けられている。玄門は幅1m，高さ1.85mである。

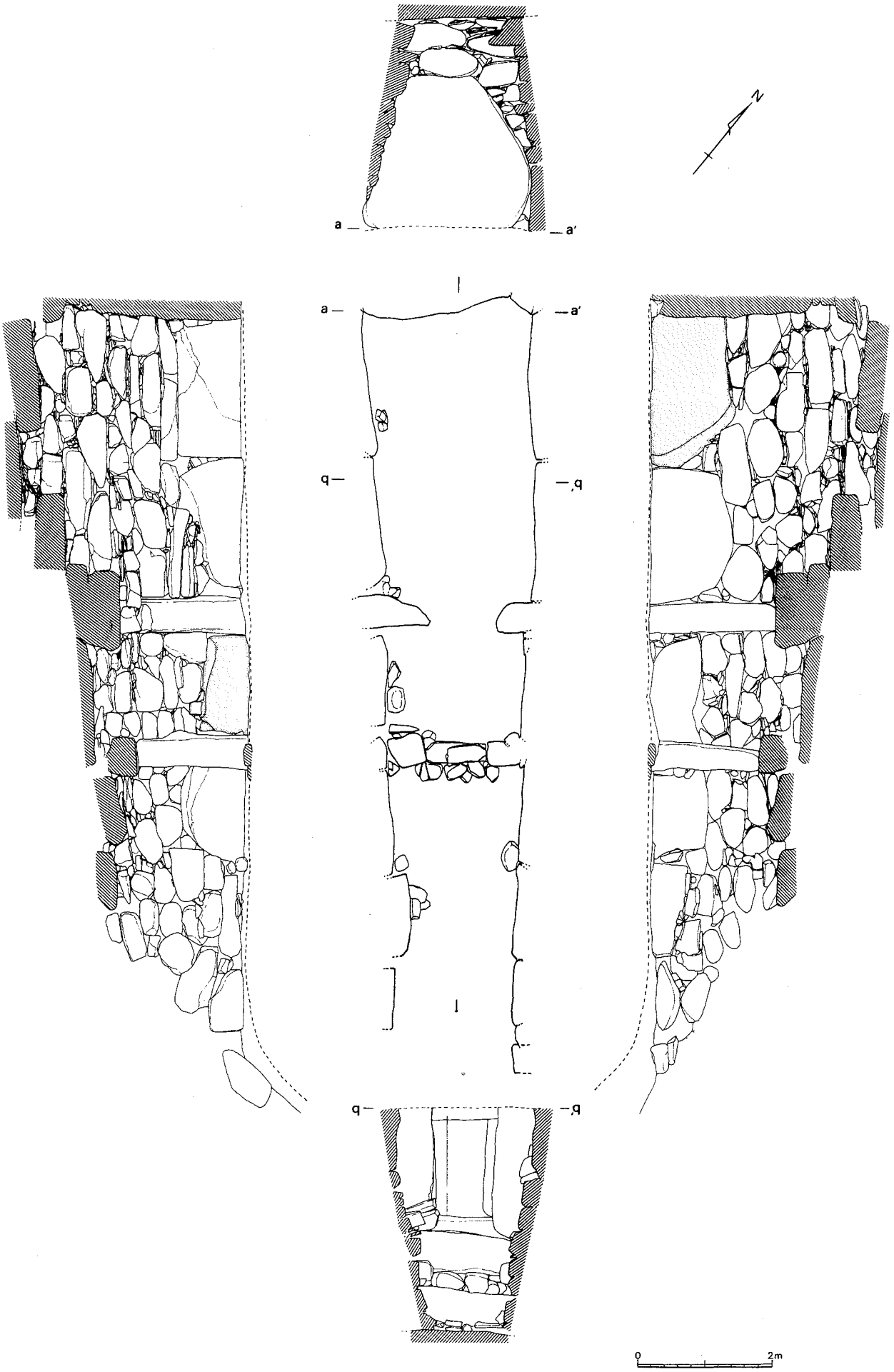
前室の側壁には一枚の腰石を配している。腰石の上部に塊石を5段積み上げている。西壁の塊石の積み方は目地が直線的に通った典型的な重箱積みがみられる。前室の規模は，長さ1.6m，幅2.0m，高さ2.2mを測る。腰石の大きさは長さ1.5m×高さ0.7m以上。西側の腰石にはクジラなどの線刻があり，その一部は埋土の下にも続いていることが確認できた。

前門の構造は，玄門とは違って両袖石が腰石の前に完全に出てしまっている。当然のことながらこの方柱形をした袖石は玄門のそれと比べると小形であることはいうまでもない。框石は一枚の板石を使用しており袖石の間にしっかりと固定されていた。

羨道部の構造は，腰石は開口部に向かって大きさを減じていく。羨門部には一枚の平石を框石とし



第3図　墳丘実測図(S＝1/200)



第４図　石室実測図（Ｓ＝1/80）

ている。框石の羨道側には高さをあわせる形で平石を並べている。腰石の継ぎ目には塊石を裏込め的に置いている。

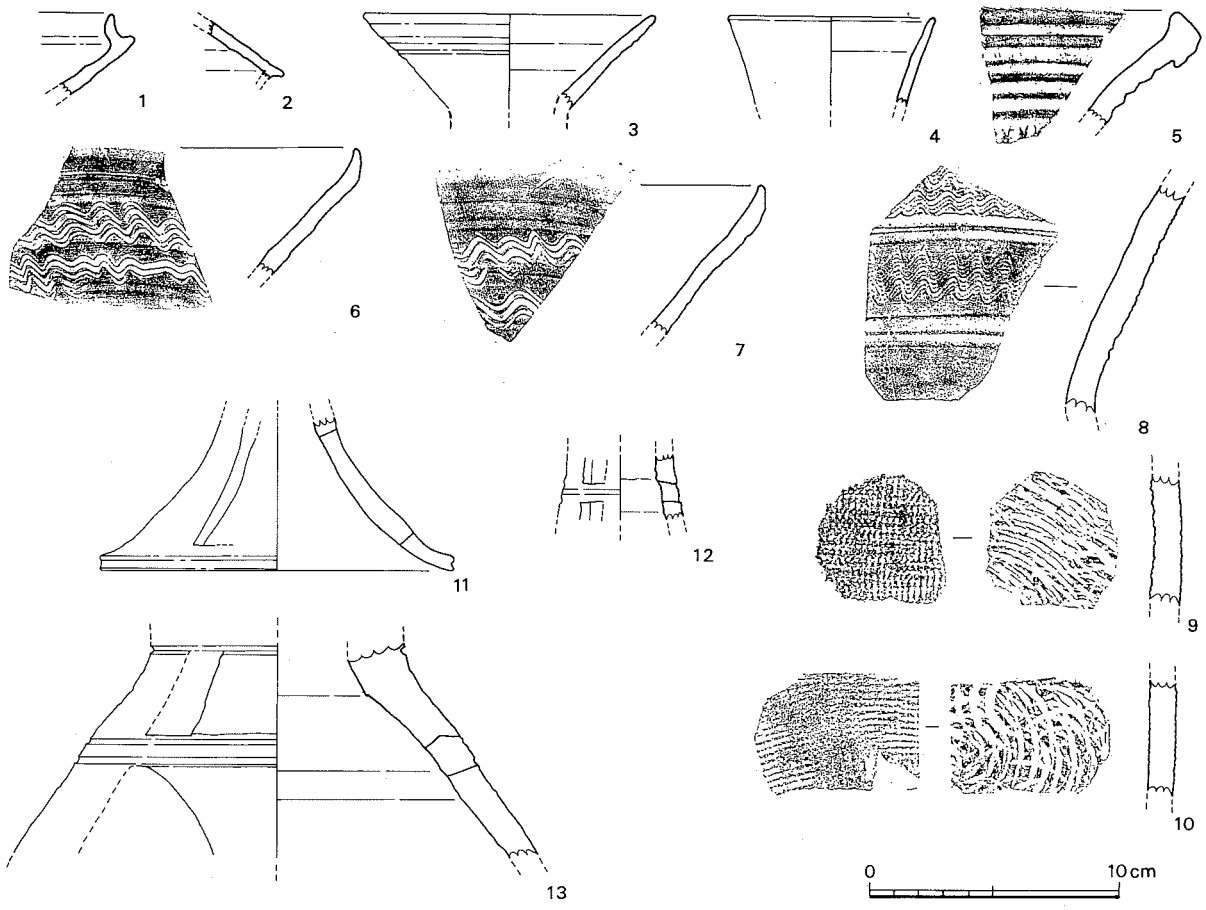
羨道部の大きさは長さ4.5m，幅は奥壁側で2.0m，入り口部では1.7m程度であり，天井の高さ1.9mを測る。開口部付近の腰石は小型化していくこともあって横からの土圧に抗しきれず倒れてしまっている（図版参照）。

3．出土遺物

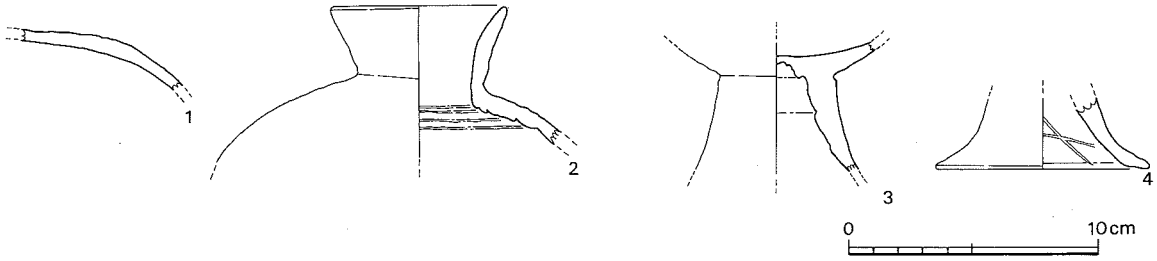
今回の調査で出土した遺物はほとんど小破片であり，いずれも石室内の攪乱部もしくは羨道部の流れ込みからの出土で原位置にあるものはなかった。

(1) 須 恵 器（第5図1～13）

1 は坏身。蓋受けの口辺は高さが低く，外反しながら立ち上がる。口辺部はヨコナデ，胴部下半はヘラケズリを施すようだが小片で詳細は不明。色調は内外ともに明灰色を呈する。胎土には細砂粒を含み，焼成はあまい。小田編年Ⅳａ期（6世紀末～7世紀初頭）。**2** は坏蓋。かえりの先端を欠失する。胎土は精選され，焼成は良好であり，色調は暗灰色を呈する。小田編年Ⅳｂ期（7世紀前半）。**3** は瑳の口縁部かとも考えられるが不明。復元口径11.6cm。口唇直下に二条の沈線がめぐる。調整はヨコナデがなされる。胎土は緻密で，焼成は良好。色調は外面は青灰色，内面は灰色である。**4** は瓶の口縁部と思われる。復元口径8.0cm。口縁上部に焼成時の灰がかかっている。胎土には石英粒を含み，粗である。焼成は良好で，色調は外面が黒灰色，内面が暗灰色を呈する。**5** は甕の口縁部片である。口縁端は肥厚し，内外に拡張する。頸部は数条の沈線がめぐり突帯状となっている。胎土は精選され，焼成は良好である。色調は外面が黒灰色，内面は淡黄灰色を呈する。**6** は壺の口縁部破片で，口縁部端は内湾気味に立ち上がる。口縁下には櫛描波状文（5条）が二段めぐる。胎土は緻密で，焼成はよい。色調は外面が黒灰色，内面が灰色を呈する。羨道部出土。**7** は大形の甕ないし壺の口縁部片。口縁の下に櫛描波状文（4条）が二段めぐる。胎土・焼成ともに良好である。色調は外面が黒灰色，内面が灰色である。**8** は壺の頸部片である。胴部には二条の沈線がめぐる，その間に細かい櫛描波状文（9条）が施されている。胎土は砂粒が含まれており粗であるが，焼成は良好である。色調は外面が黒灰色，内面が褐色である。羨道部出土。**9** は甕の胴部破片である。外面の調整は格子状のタタキ，内面は波状の当て具痕が残る。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は外面が青灰色、内面があずき色である。破片の周囲は丁寧に面取りされているところから宮崎貴夫が風呂川遺跡の報文の中で指摘した円盤状製品としたものに該当する（宮崎1982）。羨道部出土。**10**は **9** と同一個体とも考えられる甕の胴部破片である。外面の色調が暗灰色を呈するほかは，調整や胎土は **9** とまったく同じである。玄室内攪乱部出土。**11**は透かしのある高坏脚である。脚はスカート状に開きながら裾部にいたり，裾端は若干内湾しながら拡張され，先端頂部はくぼみを生じている。復元径14.0cm。三角形ないし台形の透かしをもつと推測される。胎土は精選されているが，焼成はあまい。内外ともに淡黄灰色を呈する。羨道部出土。**12**は長脚の高坏の脚柱部片。上下に長方形の透かしを有し，透かしの間には二条の沈線



第5図　須恵器実測図(S＝1/2)



第6図　土師器実測図(S＝1/2)

をめぐらす。胎土には細砂を含むが精選されており，焼成は堅緻である。色調は内外ともに暗灰色である。**13**は器台脚部片である。方形と半円形の二段の透かしを有すると推定される。胎土は細砂粒を含むが精選され，焼成は堅緻である。色調は内外面ともに青灰色である。羨道部出土。

(2)　土 師 器（第6図**1**～**4**）

1は坏蓋。須恵器模倣の土師器である。天井部は器壁が薄い。調整は摩滅しており不明。胎土には砂粒や絹雲母・長石を含み粗い。焼成はややあまい。羨道部出土。**2**は直口の瓶の口縁部から片部にかけての破片。片部内面には粘土紐の輪積み痕（幅2cm）が顕著に残る。内面は指オサエのみで未調整である。口縁部内面から外面にかけては平滑にナデている。胎土は精選されており，細砂粒しか含まない。焼成はやや軟で，色調は外面が黄橙色，内面は灰黄色である。羨道部出土。**3**は高坏の坏部

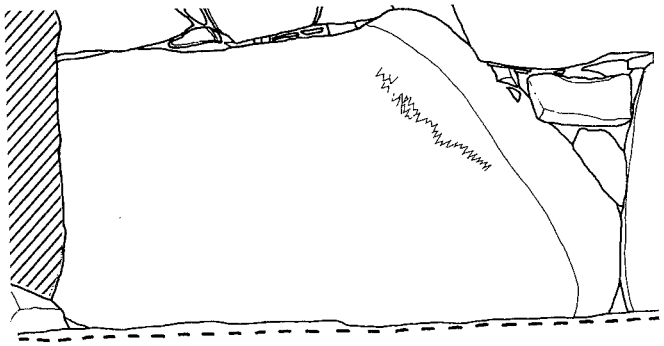
および脚柱部。胎土には石英・赤色砂・砂粒を含み粗である。焼成はややあまく，内外ともに黄橙色を呈する。**4** は小形の高坏形土器の脚裾部である。裾部と脚柱部との境で若干屈曲する。内面に×字状の線刻記号を有する。胎土は赤色砂・砂粒を含み，**2** に類似する。焼成はややあまく，色調は黄橙色である。羨道部出土。

第4章　総　　括

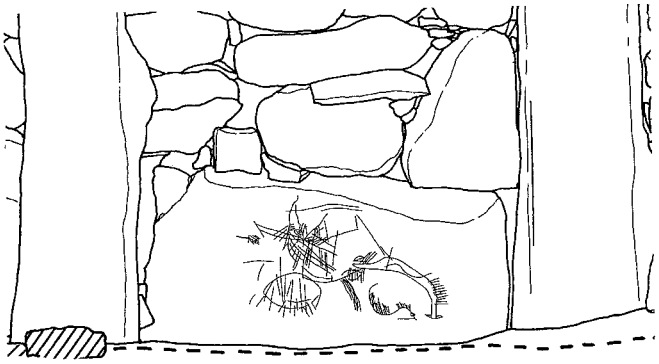
1．有明海西岸の古墳について

長戸鬼塚古墳はいわゆる九州型横穴式石室であり，玄室と前室をもつ複室構造で，しかも線刻画を有する。その平面プランは玄室奥壁の幅2.5m，羨道部で1.7mとなる。玄室は羽子板状の長方形で，前室は方形である。こうした石室構造をもつ古墳は，小長井町から高来町にかけての諫早湾に突出する台地に造営される傾向にあり，海を意識した立地である。類例として大峰古墳や単室ではあるが丸尾古墳などがあげられる。一方対岸の島原半島北部は県本土部ではきわだって古墳の多いところであるが，この地域の石室ははとんどが単室で，平面形は方形に近いものである。またこれらの古墳は経済基盤となる沖積平野の最奥部もしくはそれを見下ろす丘陵に造営される場合が多い。こうしたことから諫早湾の両岸に展開する同時期の古墳の被葬者は性格や系譜を異にするものであろう。

長戸鬼塚古墳をはじめとする諫早湾北岸の後期古墳の石室は杵島山麓のものときわめて類似しており，系譜的にそれらの地域とつながるもの(註2)と推測することも可能であろう。詳しくみてみると長戸鬼塚古墳の袖石は玄門では側壁に挟み込まれているのに，前門は内側に独立しており，いわば折衷的なあり方である。小長井町大峰古墳は玄室奥壁に石棚をもつなど特異であるが，長戸鬼塚古墳の袖石とは逆に玄門のそれが独立して，前門は側壁に挟み込まれている。小松譲が紹介した龍王崎6号墳・永池古墳と比較する（小松1994）と，本墳は袖石の置き方に若干の差はあるものの，石室の平面プランはほぼ同じであることや，線刻画をもつことなど共通点が多い。



玄室東側壁腰石



前室西側壁腰石

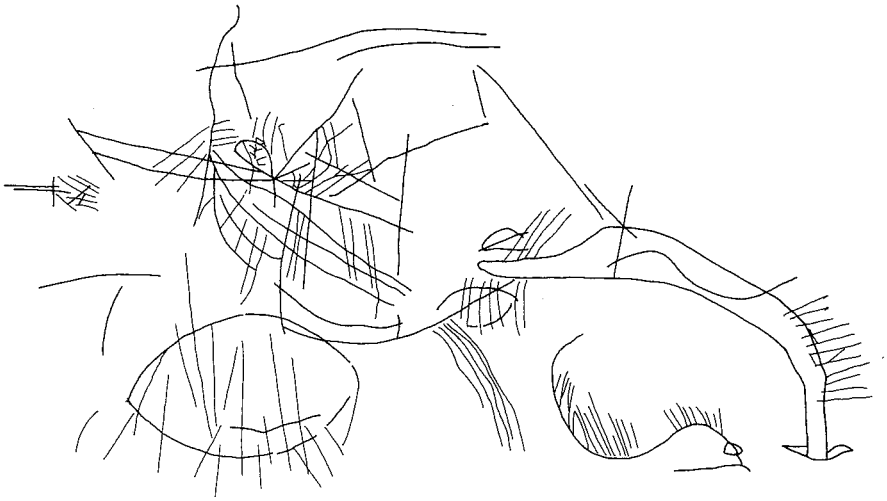
0　1m

第7図　線刻画実測図

2．線刻画について

森貞次郎は線刻画を「彩色壁画より後出のもので，全く別の発想によるものであり」「自由画風線刻画の製作は，それが呪術的な儀礼をともなうものであったとしても，作画の専

業集団によるものではなく，その図柄や構図についても，任意性と即興性が強い。したがって，墓前祭において墓室の閉塞に先立って近親者の手になる，鎮魂のための素朴な絵であることが考えられる。」と定義した（森1985）。森のいうように自由画風線刻画は任意性と即興性が強いことは確かだが，渡部俊哉も指摘するように有明海沿岸の線刻画には格子・斜格子という共通する文様が描かれていることから，それに対する共通認識や共通理解があったとすべきであろう（渡部1995）。



第8図　前室腰石部の線刻画実測図

長戸鬼塚古墳の線刻画は，玄室東側壁腰石と前室西側壁腰石に描かれている。玄室には細かいピッチの鋸歯状文や斜格子文が描かれている。前室には具象的な表現で，クジラと思われるもの(註3)や大小の楕円形などの文様が表現されている。しかしクジラを除いては何を表現したものかは判読できない。クジラは，頭部がへこみ，尾鰭が三角の撞木形に表現されておりクジラの特徴をよくとらえている。内湾の有明海にクジラが出現し，それを捕ることは稀なことであろう。その経験がクジラを具体的な図案として残した要因の一つではなかろうか。繰り返すが有明海西岸の線刻画は，基本的な文様としては格子・斜格子などの直線である。人物や家などが描かれることがあっても稚拙である。そうしたなかでこのクジラの絵はひときわ異彩を放っているといえよう。

註2　佐賀県杵島山麓の古墳の石室の構造や築造方法について小松譲によれば，背振山麓の肥前東部では石室の袖石は側壁間に挟まれて立柱状石材を立てることが一般的であるのに対し，杵島山山麓の龍王崎6号墳・永池古墳の袖石は側壁から独立して柱状石材を立てるのを特徴とするという。

註3　この線刻は1982年に刊行された「II　長戸古墳・丸尾古墳」『長崎県埋蔵文化財調査集報V』を初出とするが，報文中の挿図は前室の線刻画を二つにわけて図示し，しかもクジラの絵は天地が逆になっている。この場で訂正しておきたい。

第5章　まとめ

長戸鬼塚古墳は，古くから知られていたにもかかわらず，マウンドや石室および線刻画など良好に保存されてきた。集落から離れた岬の先端部という立地条件などが幸いしたというべきであろうか。

ところで今回の調査は，羨道部天井石右下の塊石が落ちそうになっていたために，その復元と崩壊防止を念頭に置いた修復整備のためのデータをまとめることにあった。以下現地指導をお願いした小田富士雄先生の提言をもとに修復整備についての考え方をまとめてみたい。

墳丘は盛土の流失によって高さが減少しつつあり，また周辺の墓地造成・畑などによって墳丘周囲の形が改変されており築造当時の姿をうかがい知ることはむずかしくなりつつある。墳丘の現況は樹木や竹が繁茂しており，それらの樹根がかろうじて土砂の流失をくい止めているが，将来的にはそれらの根は盛土を崩落させてしまう危険性が高い。そのため盛土の流失防止には樹根を完全に駆除し芝生などによって墳丘全体をおおうことが望ましい。

石室は開口していたために常に生活の場として機能していたらしく，玄室や前室では焚き火の跡がおびただしく，天井部まで煤で黒く変色している。石室自体は若干西側へ傾いており，その結果側壁の塊石の間に充塡された小礫や小板石が崩壊もしくははずれかかっている。また崩壊の危険性が指摘されていた羨道部天井石右下の塊石がはずれるのも時間の問題であろう。

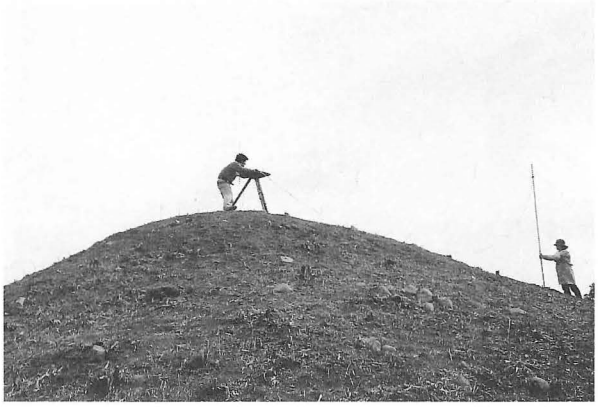
線刻画は玄室と前室の腰石に鉄釘様のもので刻まれており，特にクジラと思われるものがある前室西側の線刻は後世の落書きも少なく良好である。ところで現在は玄室まで入ることは容易であるため常にいたずらされる危険性を孕んでいる。その防止策の一つとして前門部に格子等を設けて石室内部への進入を防ぐことが肝要であろう。線刻自体は羨道部からの自然光でみることが可能であり，鑑賞の妨げにならないと思われる。

長崎県本土部は本古墳を含め３基の線刻画古墳があるが，小長井町丸尾古墳は斜面崩壊によってかろうじて玄室奥壁が残るにすぎず崩壊は時間の問題であろう。また高来町善神さん古墳は玄室に人物や斜格子が刻まれているが，玄室の上部には建造物があり古墳の原形は大きく損なわれている。そうしたことからして長戸鬼塚古墳のもつ意義は大きいといえよう。原形をよく保持した本古墳の保存措置が迅速に実施されることを期待したい。

【引用・参考文献】
小田富士雄1971「福岡県・童男山古墳」『八女古窯跡群調査報告Ⅲ』（『九州考古学研究』古墳時代編　学生社　再録）
小長井町郷土誌編纂委員会1976『小長井町郷土誌』小長井町
小松譲1994「杵島山麓に築造される二つの石室（龍王崎６号墳・永池古墳）」『佐賀考古』第１号
佐賀県立博物館1973『装飾古墳の壁画』
正林護1976「小長井町の先史・古代」『小長井町郷土誌』小長井町
高木恭二1993「横穴式石室の地域性　九州地方」『季刊　考古学』第45号　雄山閣出版
田川肇1982「長戸古墳・丸尾古墳」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ』（長崎県文化財調査報告書第57集）長崎県教育委員会
長崎県教育委員会1987『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書第87集）
長崎県教育委員会1994『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書第110集）
長崎県企画部統計課編1997『平成９年（第44版）　長崎県統計年鑑』長崎県企画部統計課
文化庁文化財保護部1976『全国遺跡地図　42　長崎県』財団法人　国土地理協会
宮崎貴夫1982「円盤状陶磁製品」『風呂川遺跡』（西有家町文化財調査報告書第１集）西有家町教育委員会
森貞次郎1985『装飾古墳』教育社歴史新書
渡部俊哉1995「肥前・壱岐の装飾古墳」『考古学ジャーナル』395　ニューサイエンス社

図　　版

遠　　景

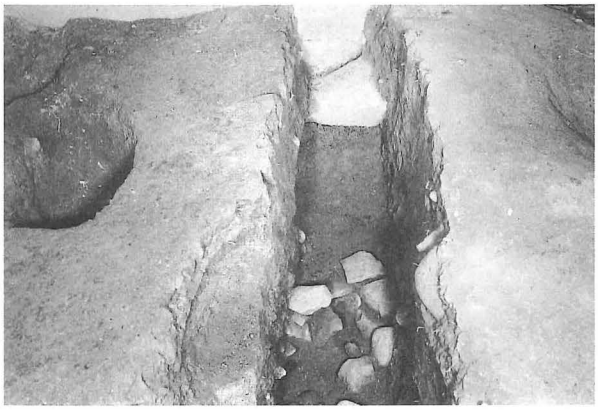


測量調査

羨道部西側

羨道部東側

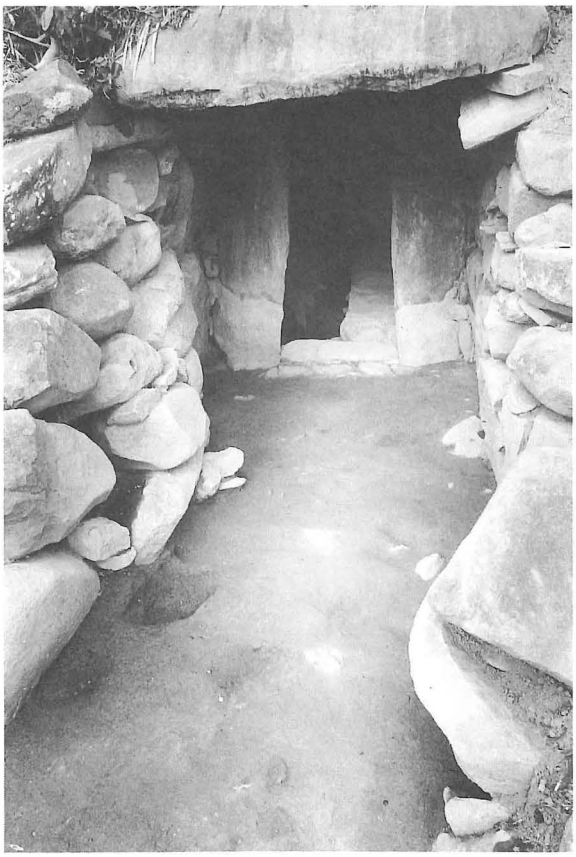
框　　石



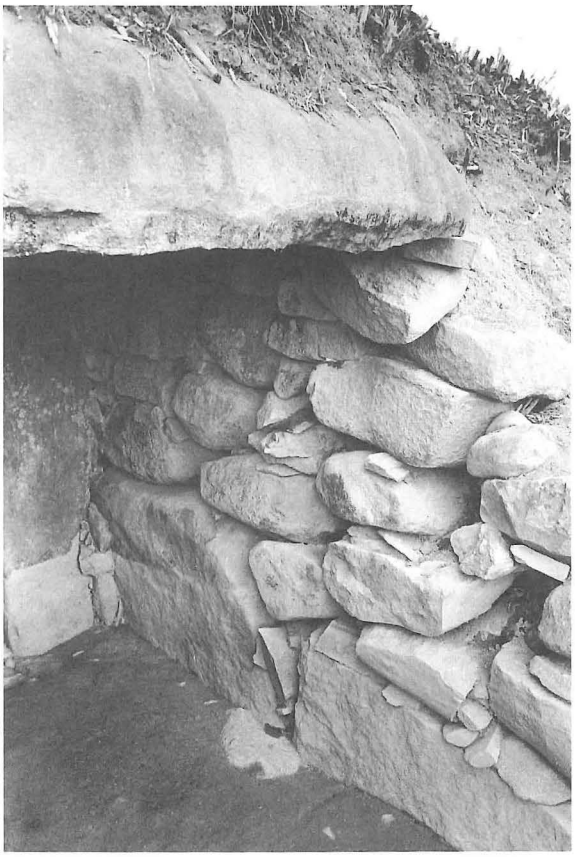
玄室の撹乱

図 版 2

古墳近景，開口部



羨 道 部

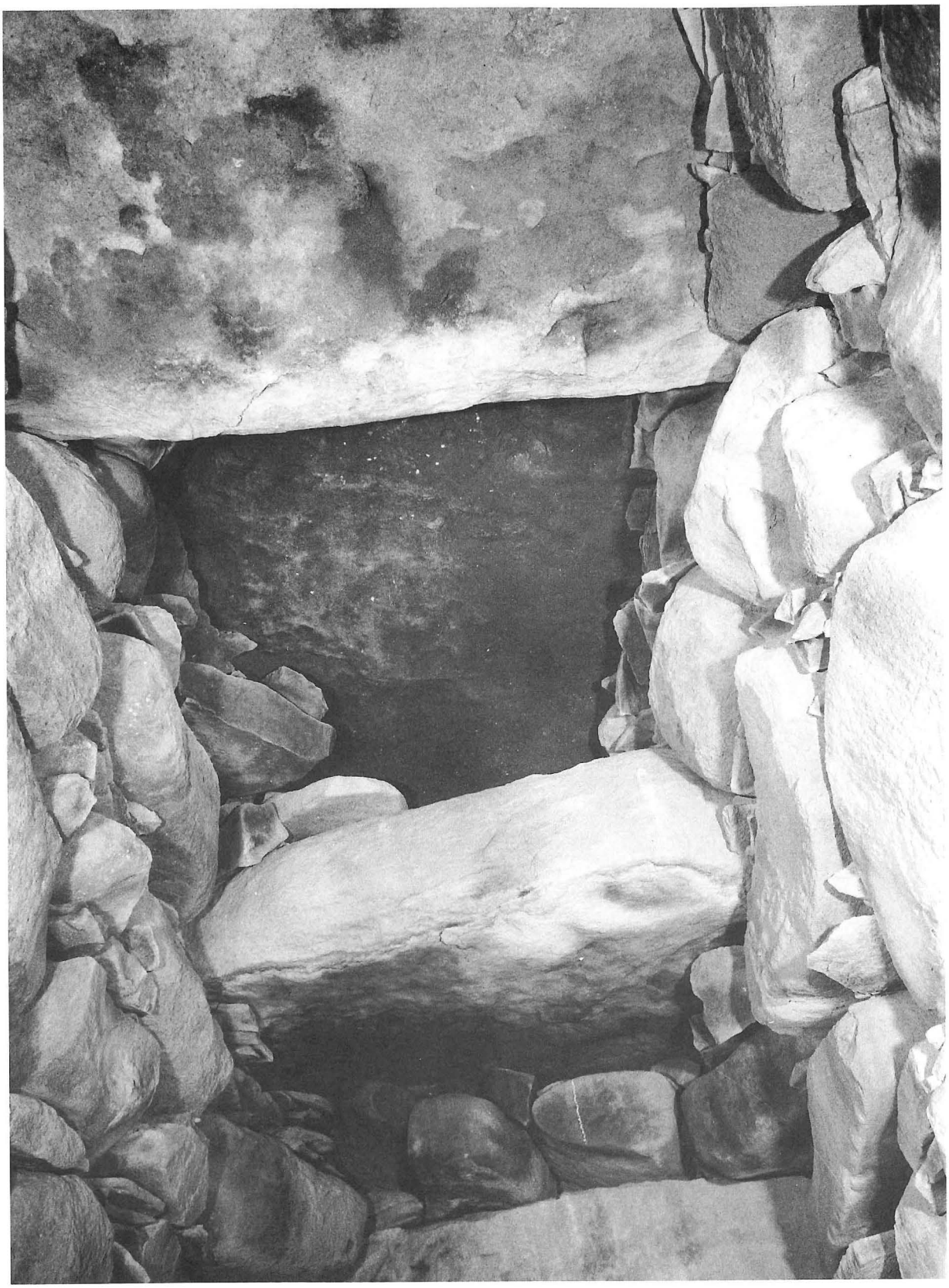


羨道部東側壁

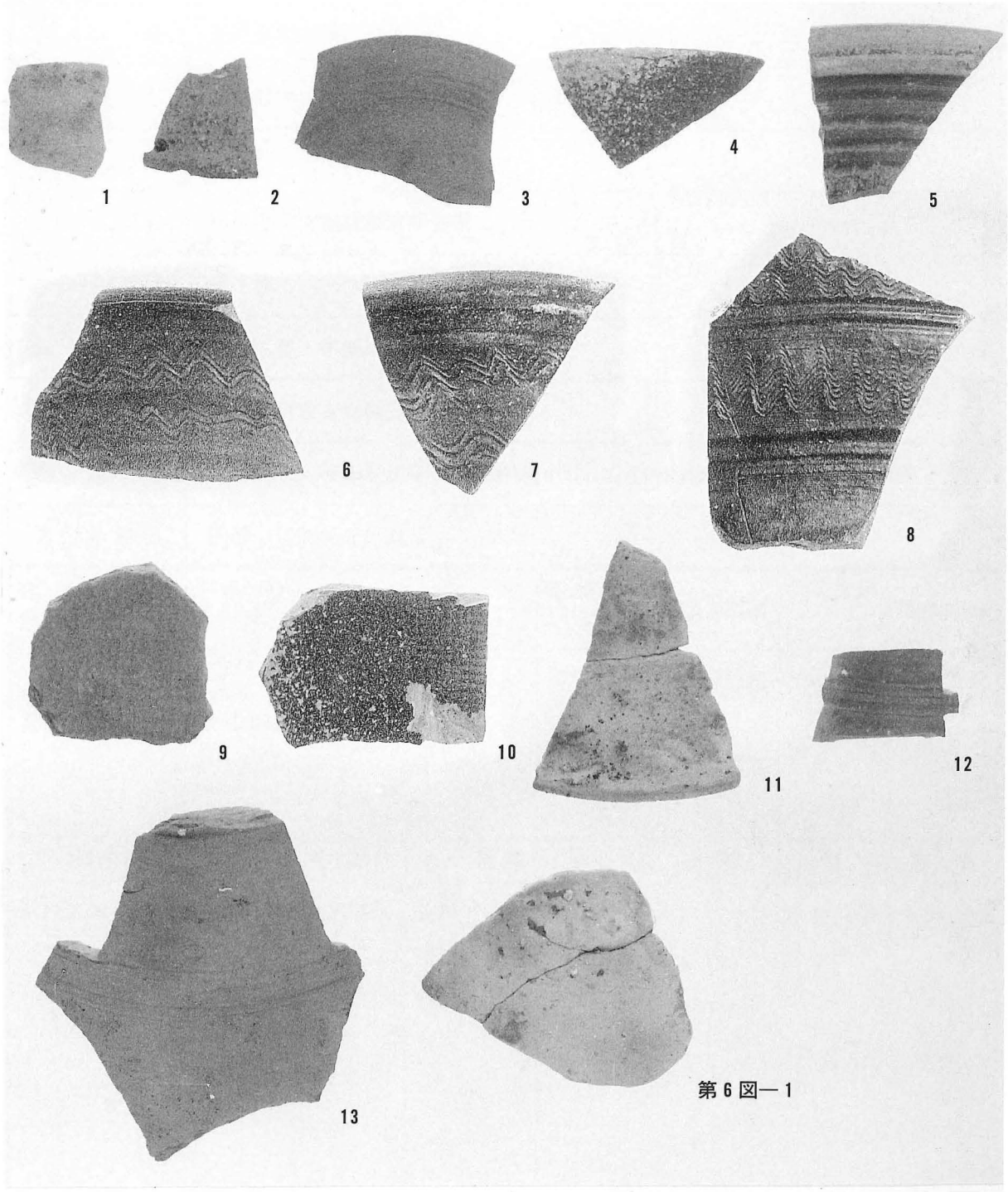
玄室奥壁

前室線刻画

図版 4



玄室天井部



第 6 図— 1

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながとおにづかこふん
書名	長戸鬼塚古墳
副書名	修復整備に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	小長井町文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	川道　寛・甲斐田　彰
編集機関	小長井町教育委員会
所在地	〒859-0165　長崎県北高来郡小長井町小川原浦名8361番地　TEL (0957)34-2201
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ながとおにづかこふん 長戸鬼塚古墳	ながさきけんきたたかきぐん 長崎県北高来郡 こながいちょう 小長井町 おがわはらうらみょう 小川原浦名	42344	23	32° 54′ 40″	130° 11′ 11″	19971110 ～ 19971121	100m²	修復整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長戸鬼塚古墳	古墳	古墳時代	古墳 横穴式石室 周溝 葺石	須恵器・土師器	線刻画をもつ

小長井町文化財調査報告書第１集

長戸鬼塚古墳

1998年３月31日

発行　小長井町教育委員会
長崎県北高来郡小川原浦名
TEL 0957-34-2201

印刷　㈱ 昭 和 堂 印 刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957-22-6000